

人生のバトンタッチ

【聖書】 列王記下 2章1～18節

主が嵐を起こしてエリヤを天に上げられたときのことである。エリヤはエリシャを連れてギルガルを出た。エリヤはエリシャに、「主はわたしをベテルにまでお遣わしになるが、あなたはここにとどまっていなさい」と言った。しかしエリシャは、「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません」と答えたので、二人はベテルに下って行った。ベテルの預言者の仲間たちがエリシャのもとに出て来て、「主が今日、あなたの主人をあなたから取り去ろうとなさっているのを知っていますか」と問うと、エリシャは、「わたしも知っています。黙っていてください」と答えた。エリヤは、「エリシャよ、主はわたしをエリコへお遣わしになるが、あなたはここにとどまっていなさい」と言った。しかしエリシャは、「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません」と答えたので、二人はエリコに来た。エリコの預言者の仲間たちがエリシャに近づいて、「主が今日、あなたの主人をあなたから取り去ろうとなさっているのを知っていますか」と問うと、エリシャは、「わたしも知っています。黙っていてください」と答えた。

エリヤはエリシャに、「主はわたしをヨルダンへお遣わしになるが、あなたはここにとどまっていなさい」と言った。しかしエリシャは、「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません」と答えたので、彼らは二人で出かけて行った。預言者の仲間五十人もついて行った。彼らは、ヨルダンのほとりに立ち止まったエリヤとエリシャを前にして、遠く離れて立ち止まった。エリヤが外套を脱いで丸め、それで水を打つと、水が左右に分かれたので、彼ら二人は乾いた土の上を渡って行った。渡り終わると、エリヤはエリシャに言った。「わたしがあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい。」エリシャは、「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください」と言った。エリヤは言った。「あなたはむずかしい願いをする。わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない。」

彼らが話しながら歩き続けていると、見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った。エリシャはこれを見て、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と叫んだが、もうエリヤは見えなかった。エリシャは自分の衣をつかんで二つに引き裂いた。エリヤの着ていた外套が落ちて来たので、彼はそれを拾い、ヨルダンの岸辺に引き返して立ち、落ちて来たエリヤの外套を取って、それで水を打ち、「エリヤの神、主はどこにおられますか」と言った。エリシャが水を打つと、水は左右に分かれ、彼は渡ることができた。

エリコの預言者の仲間たちは目の前で彼を見て、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」と言い、彼を迎えに行き、その前で地にひれ伏した。彼らはエリシャに言った。「御覧ください。僕たちのところに五十人の戦士がいます。彼らにあなたの主人を捜しに行かせてください。主の霊は彼を運び去り、どこかの山か谷に投げ落とししたかもしれません。」しかしエリシャは、「行かせてはならない」と答えた。彼らがあまりにもしつこく願ったので、「行かせなさい」と言うと、彼らは五十人を送り出して三日間エリヤを捜させたが、見つけることができず、エリコにいるエリシャのもとに帰って来た。エリシャは、「行くなと言ったではないか」と言った。

【序】 川越市民の叡智と勇氣

9月1日は**関東大震災**の記念日でした。1923年(大正12年)9月1日午前11時58分に突然発生した大地震で東京・横浜の大都市は壊滅的破壊に襲われました。丁度昼食時で火災も猛威を振るい、東京市内の**約6割の家屋**が罹災したそうです。

ところが当日の夕刻頃から、「**不逞な朝鮮人が暴動**を起こしている」「井戸に**毒**を入れている」という流言が広まり出して新聞の記事にもなり、各地にこん棒やとび口を持った**自警団**が生まれ、通行人を検問して朝鮮人を見つけては**殺す悲劇**が発生しました。震災での死者は当時10万5千人

と言われ、その約1%から数%が朝鮮人だったそうです。何と恐ろしいことでしょうか。

流言の源はどうも行政と警察だったとこれまでの調査で分かってきました。それは日清戦争で日本が勝利(1897年)して以来、朝鮮を日本が支配するようになり、1907年には日本の統監府が支配する属国にします。以来独立を求める反乱が朝鮮各地に起こり、1909年には統監府初代統監の伊藤博文がハルピン駅で朝鮮人に暗殺されています。1919年の3・1独立運動には200万人が参加して6ヶ月間も続きました。そこで朝鮮人に対する差別意識と共に、恐怖心も強まってきたからでした。

私は木曜日夜に、神田の韓国 YMCA で行われた日本の朝鮮植民地支配に於ける朝鮮人虐殺についての講演会に出席し、関東大震災での朝鮮人虐殺事件の背景である日本の朝鮮支配の苛酷さに、いたたまれない痛みを覚えさせられました。

ところが我が川越は違いました。大震災当時、市内には朝鮮人18人、中国人2人が暮していましたが、流言が伝わって来るや直ちに、市長室裏庭と警察署に20人全員を避難させて保護したのです。それは市政を支える市民の間に、デマに惑わされない叡智と勇気が、長い歴史の中で養われて来ていたからだと言われています。

奈良朝時代の716年に高句麗人1799人で武蔵国高麗郡が誕生し、稲作、陶器、紡績等の生活形態を大きく変え、地域を豊かにして来たからです。江戸末期には113村、川越の一部も高麗郡になり、川越祭りでは朝鮮通信使の仮装行列も楽しい呼び物となりました。長い歴史で身に着けて来た多民族との共生が如何に貴く、大切であるかを、私たちは改めて自覚しなければなりません。

[1] エリヤとの別れ

さて今日の聖書の学びは、旧約聖書の預言者を代表するエリヤの人生の閉じ方です。エリヤは、北王国の7代目の国王アハブとイゼベル夫婦の信仰の誤りに対する神の裁きを、はっきりと指摘して、孤軍奮闘しました。心身ともに疲れ果てて、遠く荒れ野に逃げ込み、もう死なせて下さいと神に願い求めたこともありました。しかし神は、じっくりと時間をかけて彼を立ち直らせて、新たな任務を与えて、送り出して下さいました。

エリヤの最後の働きは、後継者エリシャの育成です。エリシャは裕福な農家の息子でした。広い畑で11人の農夫と共に、それぞれ二頭の牛に土を耕す鋤を曳かせて働いていますと、エリヤがやって来て、何も言わずに自分の外套を、彼に投げかけました。しかしエリシャは、それがエリヤの呼びかけだと直感しました。そこで直ぐその夜に、両親と同僚の農夫たちと別れの食事を済ませると、エリヤに従い、彼に仕えるようになりました。

さてそれから、エリシャはエリヤからどれほどの期間、身近に教育訓練を受けたのでしょうか。アハブ王が死に、次の王アハズヤも死にます。エリヤがアハズヤに、神の裁きとしての死をはっきりと宣

告している姿を、エリシャは、身近に見ていたことでしょう。しかしそれ以外の出来事は、聖書に何も記されていません。ただしエリヤが死に場所を求めて、サマリヤの**ギルガル**から、**ベテル**、**エリコ**を訪れた時に、どの町にも預言者の集団がいました。これは**預言者の養成所**のようなものが、主要な町に生まれていたことを現すと考えられています。としますと、エリシャもその一つで、信仰を同じくする仲間と共に預言者としての養成・訓練を受けたのでしょう。ギルガルを出発する時に、エリヤが「ここに留まって居なさい」と言いました。エリシャに、ギルガルに留まって預言者養成に当たるようにと、考えていたのかもしれませんが。しかしエリシャは何処までも、エリヤについて行き、**離れません**でした。

エリコの町を出てそのまま東に向かえば、ヨルダン川で、その向こうには、もう町はありません。エリコの預言者集団 50 人も、**ヨルダン川のほとり**で留まる二人を見て、遠く離れて見守りました。エリヤが外套を脱いで、川の水を打つと、水が分かれて川に道が生じました。二人は向こう岸に渡りました。いよいよ**別れの時**です。「あなたのために、何をしようか」。「あなたの**霊の二つ分**をください」。財産相続では、長男が他の2倍を受け取ります。「あなたが**神から与えられている霊**を相続させて下さい」という申し出でしょう。しかし神の霊は神から頂くもので、エリヤが与えるものではありません。「私をお召しになる神の御業を見ることが出来る信仰があれば、どうかな」。こう話して歩いているうちに突然、火の馬に引かれた**火の戦車**が現れ、エリヤを乗せて天に上って行ってしまいました。

「わが父よ、わが父よ、**イスラエルの戦車よ**、その騎兵よ」。エリシャは叫びましたが、もうエリヤは見えません。彼は自分の衣を引き裂いて悲しみました。するとエリヤの外套が彼の前に落ちて来たのです。エリシャはその外套を取り上げると、エリヤがしたように、ヨルダン川の水を打ってみました。すると同じ様に川の水が分かれて、来た時と同じく、彼は川の中に出来た道を歩いて渡ることが出来たのです。それを見ていたエリコの預言者 50 人は、「**エリヤの霊がエリシャの上に留まっている**」と分かり、彼の前にひれ伏しました。

彼らは、エリヤが火の戦車に乗って天に上って行ったのを、見ていません。そこで全員で3日間探しまわりましたが、遂に**エリヤの遺体**を見つけることは出来ませんでした。**モーセ**は、イスラエルの民を奴隷の地エジプトから、約束の地カナンに導いて来ましたが、ヨルダン川の手前で、**ヨシュア**を後継者として立てると、その**モアブの地で死**にました。しかし葬られた地を誰も知りません。交替したら、**前任者はきっぱりと姿を消す**のですね。モーセの後を継いだヨシュアは、民全員を率いて、神が流れをせき止めたヨルダン川を渡り、約束の地カナンに足を踏み入れたのでした。エリヤ、エリシャと共通していますね。

[2] エリヤの働きの特色

エリシャはエリヤを「わが父よ、わが父よ、**イスラエルの戦車よ**」と言いました。人間を超えてたくましく走りまわる馬に鉄で囲んだ車を引かせ、鎧を着け槍や弓をかざした兵士を乗せて戦場を駆け巡る**戦車**が、当時の**最強の兵器**でした。現在ですと、中国、朝鮮などの軍事パレードで、大きなミサイル爆弾を装備した鉄の台車が轟音をとどろかせて行進する光景を思い浮かべます。

とにかく戦いに於いて、最も力を発揮する**戦車**にたとえられた**エリヤの生涯**だったのです。そうです。カルメル山でバアルとアシュラの預言者 850 人と**彼一人**で**対決**して、**真の神**を明らかにする信仰の勝利を得たエリヤです。まさに戦車にたとえられる**主の預言者**でした。

しかしエリヤは、鉄で造られた戦車ではありませんでした。私たちと同じ**人間**でした。カルメル山での壮烈な戦いで信仰のありったけ、命のありったけを注ぎ尽くしてしまうと、王妃イゼベルの強硬な反撃に立向かうことが出来ず、怯えおののいて遠く国外に**逃げ出して**、死のうとしています。そのような彼を、神は再び立ち直らせて、**預言者の生涯**を全うさせて下さったのでした。

アハブ王が宮殿に隣接する**ナボトのぶどう園**を、買収しようとして断られた時、王妃イゼベルが、町の長老たちに命じてナボトを裁判にかけ、2人の偽証人を雇ってナボトが神と王を呪ったと言わせて死刑に処し、土地を取り上げて夫のものにしてしまいました。その時エリヤはアハブ王の前に立ち、その**罪を厳しく糾弾**し、**主の宣告**を伝えました。「見よ、わたしはあなたに災いを下し、あなたの子孫を除き去る。アハブに属する男子を**すべて断ち滅ぼす**」。

すると**アハブ**は衣を裂き、粗布を身にまとい、断食し、粗布の上に横たわり、打ちひしがれて歩きました。エリヤは、その悔い改めを見て、**主の赦しの言葉**を取り次ぎました。「**彼が**生きている間は災いを下さない。その子の代になってから、彼の家に災いを下す」(列王下 21:29)。

何という**甘い神**でしょうか。またそのような赦しを取り次ぐ、**甘い預言者**エリヤでしょうか。でもエリヤは、自分自身も強さを押し通すことが出来ない、弱さ、脆さを持つ者であることを、**自分の挫折経験**から強く自覚して、**悔い改め**を大切にしながら、罪に対する厳しい裁きの預言者として生きたのです。私たちもこの信仰を持ちたいものです。

またエリヤは、「自分が**一人だけ**になってしまった」というプレッシャーに追い詰められました。すると神は「**イスラエルに 7000 人を残す**」と彼におっしゃいました。先程、エリヤが死に場所を求めて、サマリヤのギルガルから、ベテル、エリコを訪れた時に、どの町にも**預言者の集団**がいたことにふれました。

そしてこれは預言者の**養成所**のようなものが、主要な町に生まれていたことを現すのではないかと申しました。「**7000 人を残す**」との神の言葉をエリヤが、自分の使命の一つと受け取って、積極的に預言者の養成にも取り組んだのではないのでしょうか。これもエリヤの**素晴らしい働き**の一つではないのでしょうか。

今月の 25 日第 4 日曜日に、私は筑波教会で奉仕します。「**説教の出来る教会員を皆で育てていこう**」という新しい目標を立てたので、助言して欲しいと招かれたのです。嬉しいですね。川越教会も如何でしょうか。

[結] バトンタッチ

エリヤは、「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください」と訴える信仰の挫折を経験しました。しかし主に導かれてホレブの山で、**新しい使命**を受けました。その中の一つに、「アベル・メホラのシャファトの子エリシャに油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ」がありました(列王上 19:16)。**後継者の育成**です。そこでアベル・メホラに出向い、畑で働いているエリシャに外套を投げかけて、呼びかけたのでした。エリシャにとっては**突然の出来事**だったことでしょう。しかし彼はその呼びかけに**直ぐに応じた**のです。不思議ですね。**人生の出会い**とか**人の絆**には、**霊の働き**としか言いようのない**不思議なスタート**があるものです。しかしそれからのエリシャは、エリヤに日々に仕えて、信仰を学び、預言者となる道を歩み始めました。そして最後には、「ここに留まれ」と幾度の言われても、何処までも離れずにエリヤに**従い通しました**。ここに、エリシャがエリヤの**真の後継者**となった**秘訣**があったのではないのでしょうか。

人生には色々な**バトンタッチ**があります。親から子へは何をバトンタッチしていくのでしょうか。仕事上のバトンタッチ、これも色々あるでしょう。さしずめ私の場合は、川越教会の牧師を誰にどのようにバトンタッチすることになるのでしょうか。大事な課題です。**神の御心**をよくよく聞きとって、お従いしていかなければなりません。御加禱下さいますよう、お願いいたします。

祈ります:神さま、今日はエリヤからエリシャへのバトンタッチを学びました。エリシャはエリヤにどこまでも付き従いました。これはと示された人や仕事にどこまでも付き従って離れず、バトンを受け継いでいく生き方を大切にして、自分の人生を歩む者にして下さい。神さま、あなたが私に何をお望みなのかをお示し下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン